

# 指導者の視点からみる園児を楽しく

## ピアノに向かわせる試み

### —園児のピアノ導入から、ピアノでの表現の可能性を考える—

会津大学短期大学部 非常勤講師  
橋本ピアノ教室「ミオ・ピアチューレ」主宰  
鈴木 絵美

#### I. 目的

ピアノ指導をするにおいて、いかに演奏者の個性を引き出すか、その個性をいかにしてピアノでの表現に繋げ、聴く人の興味・惹きつける演奏にもっていかかが、指導者の常なる課題である。昨今の益々の教育への意識の高まりからか、子供達向けの様々なジャンルの習い事が増え、園・学校を終えてからの放課後や週末など、幾つかの習い事をこなしている子供達が多く、ピアノだけに多くの時間を割くことが難しい子供達も多いように感じる。しかし、ピアノにおいては、レッスン時間内だけピアノ（音楽）触れていれば上達する、というものではなく、自宅でのこつこつとした練習の積み重ねにより身につくものなので、どうしても自宅での自主練習が大切になってくる。何事でも、「好きこそ物の上手なれ」で、ピアノも同様、「ピアノを好きになる」ことこそ重要である、と考える。その為、特に導入の段階では、先ずは楽しくレッスンに足が向くよう心掛け、限られた時間の中、効率よく、また、楽しませるレッスン内容となる工夫により、自宅での練習において自発的にピアノに向かい、ピアノは楽しい！という意識を持たせられるよう、常に一人一人の個性・性格などを考慮し、個人個人に合ったレッスン内容を工夫する必要がある。

#### II. 「表現力」に繋がるレッスンの方法

##### 1. 導入におけるレッスン方法

①最初のレッスンでは、ピアノの構造を見せ、興味のままに自由にピアノに触れさせる。次に、鍵盤の白鍵・黒鍵の認識をさせる為、白鍵だけ・黒鍵だけを手のひらで滑らせ触れさせる（白いところと黒いところがあるね、シマウマみたいだね、など声掛けしながら）。次に、ピアノの音の高低・高音部から低音部までの確認作業の為、高音部をトリルで鳴らし、小鳥の絵を見せ、低音部を鳴らし、ライオンの絵を見せ、ピアノの全鍵盤を低音部（又は、高音部から）から順番に鳴らし、低い音から高い音があるね、とピアノの音の高低を理解させる。

ピアノを始める年齢が、低年齢であることから（筆者自身の経験では、2歳～園児が多い）一つのこと集中できる時間が（低年齢になればなるほど）短い為、「ピアノのレッスンに通う」、ということに慣れてもらうことが先ず第一歩、また、教える側の意識としても、ピアノを教える！覚えさせよう！という意欲ばかりに傾いてしまうと、押し付けのレッスンになってしまいがちなので、筆者自身も時々そうならないかと振り返りながら、特に、最初の数ヶ月は、無理やりピアノの前に座らせることより、様々なことを少しずつこなさせ、ピアノ、というより、音楽に親しんで、楽しくレッスンを終えられるような内容を組む。レッスンに慣れてきた子供達は、途中集中力が切れることはあるが、こちらから促さなくとも自然とピアノの前に自ら座るようになる。具体例を幾つか挙げてみる。

- (1) 上記の、ピアノ高低の理解の為の、小鳥・ライオンに色塗りさせる。
- (2) ピアノでのご挨拶（I→V→I、の和音を使い、C-Durの場合：ド・レレ・ミー「こんにちはー」（指導者）→ド・レレ・ミー「こんにちはー」（生徒）→ミ・レ・ドー「○○ちゃん・君」（指導者）→ミ・レ・ドー「はーあーいー」（生徒）慣れてきたらこれを色々な調でもやってみる）恥ずかしがって歌えない子は、保護者同伴の場合は、「じゃあ、ママ（パパ）にも歌ってもらおうね」、と保護者にも協力してもらう。レッスンの回を重ねると、徐々に声を出してくれるようになることが多い。
- (3) 指導者・生徒が向かい合い、それぞれがカスタネットを持つ。絵の書いたカードを見せ、その絵の名詞をカスタネットで指導者→生徒の順番で打つ。（「これは何かな？」「りんご！」「そうだね」、「り・ん・ご」と言いながらカスタネットで打ち、続いてすぐ生徒にも真似させる。その子の名前や、家族の名前打ちなどもすると喜ぶ。）→リズム感、又、リズムの理解から拍子感にも繋がる。
- (4) トン・トン・パー（保護者同伴などの場合）：始め、「4分音符・4分音符・2分音符」位のイメージで、適当にピアノで和音を弾き、保護者と生徒向かい合い、トン（それぞれ両手打ち）トン（それぞれ両手打ち）パー（お互いの手を合わせる）。これを速くしたり遅くしたりしながら行う。「だんだん速くなるよー」と速くすると喜ぶ。

②教材は、一回目のレッスンでの様子で選ぶ。小学生から始める場合は音符の理解も早いので、始めの教材として比較的音の多いものを選ぶが、そうでない場合「真ん中のド」

$\left[ \begin{array}{c} \cdot \\ \text{ハ} \end{array} \right]$ （一点ハ）から暫く音は増やさず、4分音符の長さできちんと弾け、左右どちらで弾くのか、4分休符の理解、指番号、を先ずしっかり身に付けさせたい。

- (1) 「真ん中のド」 $\left[ \begin{array}{c} \cdot \\ \text{ハ} \end{array} \right]$ （一点ハ）の理解  
2歳～園児においては、たいてい五線譜ノートは使用せず、B4程度の自由帳をレッスンで用いる。この年代は、書いたり・色を塗ったりする作業が好きなので、ノートに大きく五線譜を書き、「ド」を書き込み、「真ん中のド、真ん中のド、・・・」と声に出させながら薄く書いたものはなぞらせ、それを実際ピアノの譜面台に置き、弾かせる。この際、「1の指がド」、という理解にならないように、色々な指で弾か

せる。

#### (2) 4分音符の長さの理解と4分休符

まだ、4分音符という名称が難しい為、「しーぶん」という言い方にし、「しーぶん・しーぶん・・・」と言いながら弾かせる。2分音符の場合「に一ぶんおんぶ」8分音符の場合「ティティ・・・」となる。慣れてきたころ、4分音符が一拍分、2分音符が二拍分・・・というように補足していく。4分休符は「とーん」でお休みだよ、という約束にし、手を上に上げすぎる場合が多いので、「上げすぎると戻ってくるのが大変だからね！」と徐々に休符の待ち方にも意識させる。

#### (3) 左右どちらで弾く音符かの理解

導入時に限るが、「棒が上を向いていると右手」「棒が下向きだと左手」という約束にし、自由帳2ページを使い、片側に大きく、棒が上の4分音符、もう片方に下向きの4分音符を書き、その約束事を伝え、その書いたノートを使い、「さあ、これはどっちの手かな？」と向かい合いクイズのように何度か繰り返す。間違っても、何度かのレッスンで繰り返すうち、理解してゆく。

#### (4) 指番号

自由帳に、その子の両手の手形を書き、そこに番号を書き込む、または、指導者と生徒の両手を合わせ、「1・2・3・4・5」と言いながら、その指を押し返す。そのうえで、(1)で述べたように、「ド」を色々な指で弾かせる作業にもっていく。

ここまで、進むと、同じ要領で、音数を増やしていける。また、自由帳の使用方法としては、手書きの五線譜に「高音部記号(ト音記号)」や「低音部記号(ヘ音記号)」を書き込み、なぞらせる作業や、音符の丸を書く練習としての風船書きなど、色々な遊びも取り入れながら、自由帳の書き込みと、実際の楽譜を見比べさせ、楽譜の仕組みも学ばせる。

## 2. 「表現力」に繋がるレッスンを考える

①耳から入る情報も重要ではないか？子供が言語を取得してゆく過程を考えると、生まれてから、日々の家族の会話、自分に向けられる話声を耳で聞き取り、その積み重ねで声を発し、言葉を覚えてゆき話すようになる。書き取りは、3～4歳頃からようやく始まる。また、筆者自身の経験からも、園児の頃や、小学生の頃に意識せず自然に入ってきた音楽の記憶というのは、今でも非常に鮮明である。そのことから、レッスンの中に、歌わせる時間も僅かでもいいのでなるべく毎回取り入れたり、小さいうちから音楽会や、何か音楽に触れられる時間を積極的に持ってもらえるよう勧めている。

具体的には、音の書き取りが進んでいない場合でも、「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド」を歌わせる。最初は、基本となるC-Dur・調号のつかない「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド」の音階の上行形・下行形を歌い、それに、ハンドサイン(腕を曲げ、お腹の位置を真ん中のド、とし、そこから音階に合わせて腕を上下させながら歌わせる)なども加える。アレンジし、「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ファ・ミ・レ・ド・ミ・ソ・ミ・ド」の形で歌わせたり、教材のメロディーの一部分を歌わせたりする。すると、まだ、音を学んでいない子も、自発的に楽譜に書かれた音を指し「この音は〇〇かな?」「この音はこう書くん

だ」というような発見に繋がってくることもある。

また、楽譜の一部分を歌わせるに当たり、フレージングの理解や、抑揚をつけた歌い方を一緒にし、その歌い方に近い表現をピアノで出来るよう自分の耳で聴く作業をすることで、自身の音を聴く意識を高められる。

### ②音楽に合わせ、体を使った活動

- (1) リングに色々な色のリボンのついたものを両手分の2つ準備し、色々なテンポ設定やリズムを変えた即興に合わせて、また、童謡「ちょうちょ」の音楽をピアノで弾き、生徒はリボンを羽にし「ちょうちょ」にみたてたりしながら、音楽に合わせて自由にテーブルの周りなどを歩かせる。くるくる回ってみたり、踊ってみたり、音楽の終わりに合わせバレエのようなお辞儀でポーズをとったりと、いきいきとした子供達の表現がみられるのが面白い。「高い音で、きれいな感じのを弾いて！」や「お花の音楽は？」など、色々トリクエストが出ることもある。
- (2) 教室のテーブル周りや、音楽教室であれば教室内の空きスペースを使い、決まりごとのある音楽を予め伝え、その音楽に反応した動きをし、遊ばせる。基本テーブルの周りをまわる動きの中で反応させる。幾つか具体例としては「歩く早さ程度の音楽＝歩く」「16分音符の連続のような、速い音楽＝走る」「スタッカートの和音＝ジャンプ」「高音部をランダムに単音で鳴らす（雨の音楽）＝傘をさすポーズ」「低音部を両手で適当な和音を大きく鳴らす（雷の音楽）＝頭を隠ししゃがむ」等。また、自動車の好きな子などは、車の運転を連想させる音楽を弾き、「さあ、運転してお散歩しよう！」と歩かせたり、走らせたり、その子その子に合わせた決まりの音楽を決めることもある。ピアノによる色々な音やリズム表現により、動作と関連づけ、色々イメージさせる。

### ③色々なパターンで弾かせる

まだ、教材の譜面に出てくる音数の少ない・強弱などのアーティキュレーションの記載の無い、初歩の8小節程度の練習曲をさらっていく過程の中に、「今度は、（小鳥さんのように・きらきらお星様のように・かわいく等、イメージを伝えつつ）小さくひいてみようか」「今度は、（ぞうさんのように・元気に等）大きく弾いてみよう」「跳ねて弾いてみよう（スタッカート）」等、色々奏法に変化をつけて弾かせてみる。すぐには反応出来ずうまく表現できないこともあるので、その場合は弾いて聴かせる。

④ある程度教材をこなし、一通りの譜読みが出来てきた場合（個人のペースにもよるが、年長児～小学校低学年）

- (1) 曲名のついた曲に関しては、自由帳に簡単な絵を書かせたり、挿絵があれば色塗りさせたり、題名からのイメージを聞き、曲目の単語の中で分からないものがあれば、その場で伝えたり、調べてくるのを次回のレッスンまでの宿題にしたりし、曲目からも曲に対するイメージを最初に本人に考えさせる。最初は「分からない」などの答えも多い場合もあるが、まずは小さなイメージからでも、一緒に取り組む。こちらからの一方的なものにならないよう、本人の中から出てくる自発的な音楽へのイ

- メージ、その曲に対する「知ろう」「考えよう」という意欲が大切であると考え。
- (2) 息の流れのように、音楽も絶え間なく流れ続けていくものなので(休符も音楽の中の流れなので、休符も含め)流れのある演奏を心掛けてフレージングを考えさせる。これに関しては、その都度気になった箇所ですべて止めて、一緒に弾き感覚を感じ取ってもらうか、楽譜にフレージングを書いたり、自身で書き込ませる。
  - (3) 演奏が、なかなかイメージとしっかりこない場合など、音符に、そのイメージの言葉をのせてイメージをつかませる。例えば、8分の6拍子、軽やかな明るい曲想の場合、リズムに弾みが欲しい箇所(8分音符4つした後、5・6拍目休符)がなかなか伝わらない場合、その部分に、「に・こ・に・こ」などと言葉付けし、「〇〇ちゃんも笑った顔すごくいいから、ここは、ピアノでも楽しい表情が欲しいんだよ」、無表情な顔をわざと作り「こんな顔じゃ楽しそうじゃないでしょ？ピアノで色々な表情・表現がらった方が、聴いている人も弾いている自分も楽しいよ」など色々な声掛けし、実際に顔の表情もつけ演奏させてみたりと、イメージに近づける。プラス、手首や腕の使い方を指導する。
  - (4) どの曲にも通じる、基本的な決まりごとを、小さな曲のうちから伝えてゆく。「しっかりとしたテンポ感」「フレーズの終わりは丁寧に」「和音のバランス」「腕・手首の使い方」「重心はおなか」「指の形(各自の癖をみながら)」等。これらを、各自、自宅での譜読みの段階で、自分で意識した楽譜の読みにつながってゆく。その結果、レッスンでは、それより先、次の段階の指導に進める。

### Ⅲ. 結果

レッスン時間内に、色々な要素を取り入れた結果、何度かレッスンを繰り返すうち、その子その子の特性が少しずつ見えてくる。「何に興味があるのか」「どの分野に一番集中時間が持続するか」「覚えるスピードはどの程度か」「自由な表現が得意か、または逆に、自発的な表現が苦手か」等である。そこから、この子のレッスンはどのように今後組み立てていけば効果的か、模索するうえで、非常に役立っている。しかしピアノ指導には終わりがなく、一人一人の成果も数年・数十年かけてみえてくるものである。今後まだまだ様々な工夫・改善をし続けていかなければならない、継続課題である。

母親から少しずつ離れ、新しい世界に踏み入れ、今まで知らなかった新しいことだらけの世界への扉が開かれたばかりの、感受性豊かな、また、そこから何事もどんどん吸収していく大切な時期、ピアノに関心・興味をもってくれた、という子供の思いを真摯に受け止め、ピアノを通して音楽の楽しさや喜びを感じ、豊かな感性が育っていきけるような指導を常に心掛けてゆく必要があると考える。